

7万3000年前、サモ・サピエンスが描いた斜交平行模様

近年、南アフリカのブロンボス洞窟内において、7万3000年前にホモ・サピエンスが描いた斜交平行模様が発掘された（図1）。一方、最新の調査によると、スペインのラパシエガ洞窟の壁画が6万5000年前にネアンデルタール人によって描かれたことが判明した（図2）。

図1と図2は、約1万年違いである。西暦2000年の歴史程度しか想像できない私たちにとっては、1万年は途方もなく長い時間に思える。しかしヒトがチンパンジーから分かれたのが600万年前で、ホモ属の元祖であるハピリス出現が250万年前という万年単位のスケールにおいては、図1と図2はほぼ同時期と捉えてもよく、何よりもホモ・サピエンスとネアンデルタール人が共存していた貴重な時期でもあった。そして技術革新性ではサピエンスに劣るといわれたネアンデルタール人でも、芸術創作においては優れた資質をもっていたことが図2で確かめられる。これがクロマニヨン人のラスコー洞窟壁画を4万年も遡り、しかもネアンデルタール人によって描かれたのである。

さて図1をあらためてよく見ると、この石片に線を刻んだ作者の頭のなかでは、図3がイメージされていたに違いない。この斜交平行模様がなんのために描かれたは不明ながらも、私なりに推察すると図2のような目的では描かれていない。つまり絵を描こうとしていない。ブロンボス洞窟では他に貝殻（ビーズ）や槍の穂先などが発掘されているが、この石片の模様は何かしらの数量・単位の記録として描かれたのではなかろうか。そしてこんな記録としてのしるし付けが、7万年の歳月を経て古代バビロニアの楔形文字で刻まれたテキストにつながっていったのではなかろうか。

平行線とか三角形などの図形を描くには、自然界の模写に比べて一段高い抽象概念を受け止める頭脳がなければならぬ。現在のチンパンジーやゾウでも、訓練させれば絵らしきものを描けるようになる（絵を描いているという認識はなくても）。しかし線分や図形を理解して描くとなるとお手上げだ。ネアンデルタール人はクロマニヨン人より大きな脳を持っていたが、ネアンデルタール人による図1のような抽象性の高い痕跡はまだ見つかっていない。図1と図2の差はわずかなように見えるが、実はとてつもなく大きかったのである。



図1. 7万3000年前にホモ・サピエンスが刻んだ斜交平行模様

An abstract drawing from the 73,000-year-old levels at Blombos Cave, South Africa
<https://www.nature.com/articles/s41586-018-0514-3>

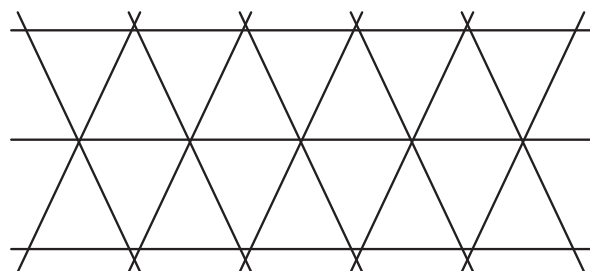


図3. 頭の中でイメージしていた図形



図2. 6万5000年前にネアンデルタール人が描いた絵

<https://www.asahi.com/articles/ASL2P5K87L2PULBJ00Y.html>
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/18/022600087/?P=2>